

## 学院長就任式（1月8日）新学院長就任挨拶 全文

小河 陽

皆様、本日はお忙しい中を、私の学院長就任式にご出席くださいまして、ありがとうございます。このたび、私は森島牧人前学院長の退任のあとを受け、学院長に選任されました。微力ではございますが、主の召命として謹んでこれをお受けし、関東学院の使命達成のため、神よりの導きと皆様のお力添えをいただきながら、職務に全力を尽くす所存でございます。

関東学院は今年創立 131 周年を迎えます。私は今、このような長きにわたる歴史を通して、建学の理念を大切に継承し育んで来られた先達の熱い思いを受け継ぎ、私もまたこの理念を大切に守り、次の世代へと伝えていく重い責務を負わされていることをひしひしと感じます。それは、一步先んじた西洋に学び追い越せという意気込みでもって「和魂洋才」の標語のもとに、伝統的また民族主義的な価値観と人間観を疑うことなしに、どん欲と言えるまでに西洋の知識と技術を取り込んでいった時代にあって、そのような民族主義的な野心を越えて、関東学院の教育が、より開かれた普遍的な価値を求める視野のもとで、知識と技術の習得にとどまらず、それが人間形成・人格の育成という目標のプロセスの中で営まなければならないという高邁な理想を追う心が込められていたと考えます。私たちはこの普遍的な価値を意識しつつなされる人間形成という理想を今もなお高々と掲げることを忘れてはならないと思います。

しかしそれと同時に、130 年余という長い歴史の流れの間に、私たちの学院を取り巻く環境も社会も建学当初より大きな変化を遂げたことも看過できません。過去の理念を繰り返すだけでは、時代の流れに逆行し、取り残されることさえ起りかねません。守るべきものは愚鈍と評されようが頑固に守る、しかし変わるべきところは大胆に変わることが必要であると思います。したがって、建学の理念は、実際には、時代の折々の具体的状況に呼応する形で、本学院が今日の状況において何に適応し、どのような価値にこだわるべきかを考える営みを通して継承されていくのであること、そして、そのことが本学院の教育使命とその具体的課題にその都度変化をもたらすこと、理念の継承はそういう仕方では達成されないものと私は考えます。それゆえ、先達の熱い思いを受け継ぐということは、この建学の理念がそうした変化した時代と状況の中でも力強く生きて働くように、私たちもまたどのように変わって行かねばならないかを絶えず問い掛け、私たちがそれに応答することを促しているように思うのです。私たちは変えてはならないものと変えなければならないものを的確

に見分ける知恵と聡明、そして変えなければならないものは困難であろうと大胆に変える勇気を持たなければなりません。私たちはグローバリズムが声高に叫ばれる時流の中で、地球規模に拡大された競争社会に投出されて、グローバルな人材の育成という標語のもとに、それに対して疑問を抱き反省する余裕もなく、そのような熾烈な競争に勝抜く才覚を備えた人間を育て上げることに全力を投入することを強いられる社会に巻き込まれています。確かに私たちは理性と能力を磨き上げ、私たちに内在する可能性を余すことなく引き出して、自分自身の、社会の、ひいては人類の発展に寄与しなければなりません。しかし世界規模に拡大した市場における競争に全力投入することは、実際には、政治の世界では地方の疲弊と衰退を、社会や経済の世界では貧富の格差をますます拡大させることにつながるのではないのか、そうならないための、平等で公正な普遍的価値の拡大がどうあらねばならないのか、人間形成を教育の目標に掲げる私たちが深刻に受けとめ、取り組まねばならない使命と課題はとてつもなく巨大であると思います。

そのような教育の使命と課題は、もちろんのことではありますが、決して学院長ひとりが担える重荷ではありません。私は関東学院という共同体の中で、学院長がどのように行動すべきかを考えます時に、**primus inter pares** というラテン語のフレーズを思い浮かべます。これは「同輩中の首席・筆頭者」という意味の言葉ですが、私が随分昔の学生時代に、ローマ皇帝アウグストゥスの業績を記した碑文「神君アウグストゥスの業績録」というものを読んだ折に見出した、模範的指導者像と言って良いものです。アウグストゥスは業績録の中でこう語っていました。「わたしは、アウクトリタス（権威）ではすべての者をしのいでいたが、各々の行政官職でわたしの同僚であった者たちよりも大きなポテスタス（権力）を持つてはいなかった」（34.1-3）というのです。実体はともあれ、「**Pax Romana** ローマの平和」をもたらし、「救世主」とさえいわれることもあった、卓越した帝国支配者の巧みな政治の理由を一部納得させる言葉だと思います。共同体のリーダーは共同体構成員の敬意を獲得することを通して、はじめてリーダーとしての任務を効果的に実行できるものだと思います。私は絶えずこの言葉を思い浮かべて、皆様の合意の上のお力添えを得て、学院長職の任務を遂行したいと存じます。

新約聖書ローマの信徒への手紙 12 章 1-8 節には「一つの体と多くの部分」の譬えがあります。この譬えで、私が見落としてはならないと思う点がございます。ここには「私たちは多くの部分・肢体として多岐多様にわたる機能を担いながらも、ただひとつの体を作り上げている共同体だ」ということで、「多様性を認め合う中での一致」が説かれていることは明らかです。しかし、それだけではなくて、「キリストに結ばれて、ひとつの体を形づくっている」という一文があることです。「キリストに結ばれて、ひとつの体を形づくっている」ということが多くの肢体が、つまり多くの異なった働きがひとつの体の働きとして機能するということの大前提となっております。ですから、同じ譬えがコリントの信徒への手紙 1

12 章 12-27 節にも記されておりますが、そこではこの譬えが「あなた方はキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」とまとめられています。一人一人が集まって、全体としてひとつの「キリストの体」を作り上げているのだ、ということです。そしてそのような体は、ひとつの部分が苦しめば、すべての部分が苦しみ、ひとつの部分が尊ばれれば、すべての部分が共に喜ぶというような共同体なのだ、ということです。どんなに見栄え良く優れた部分であろうと、それが体として機能するのは、見映えのしない見劣りがする部分もあってこそだというふうに、各部分が互いに配慮し合うからであると知ることが必要だ、ということです。なぜ、このような共同体の連帯意識が可能なのでしょう。この点がより明瞭に、エフェソの信徒への手紙の中では、「教会はキリストの体であり、キリストはその頭」というふうに展開されています。すると、新約聖書の中で語られる「体の譬え」は、私たち各自が様々に異なる才能や役割を持っても、ひとつの体を作り上げている肢体として機能している共同体であるという連帯意識を持つように諭されているだけではありません。そこには、なぜそのような連帯意識が可能であるかも示されています。それは、各自が自己をそうした共同体の一部として相対化して見ることのできる視点、キリストという頭を持つ体であるからだ、ということです。そのことは体だけを見ていては知り得ないのではないのでしょうか。つまり、体を越えて、体を超越したところで、体を統括している頭があることを意識するところで、本当の意味での自分の限界と役割が自覚させられるのではないのでしょうか。私たちはそのような共同体としての関東学院を形成していきたい、そして私はそうした動きの先だち、道先案内としての役割を果たすことのできる学院長でありたいと願っております。皆様、どうぞよろしく、心温かくお支えくださいますように、お願いいたします。